

# 袁殊と興亜建国運動——汪精衛政権成立前後の対日和平陣営の動き——

関 智 英

## はじめに

### 1 問題の所在

本稿は一九三九年から四〇年にかけて上海で活動した興亜建国運動（以下当時の略称から興建運動）の解明を通して、日中戦争期中国における和平陣営の実態に近づくかんとする試みである。興建運動は、汪精衛らが新政権樹立を模索する中、その支援を目指した影佐禎昭の要請を受け、上海総領事館の岩井英一とジャーナリストの袁殊が中心となって組織した運動であった。この運動は日中戦争の過程で現地日本当局によって設けられたそれまでの親日団体と比較すると、人員・組織・主張などに特徴があった。本稿ではこれに注目し、該時期の和平陣営を理解する際の視角を提示したいと考えている。

さて本稿で用いる和平陣営という用語について説明しておきたい。これは日本との戦闘を速やかに停止することを重視し、その上で中国の将来や秩序を構想した人々を指す（重慶国民政府や中国共産党が和平を望まなかった訳ではないが、彼らは日本に勝利するまで戦闘を続ける立場であったから、本稿では抗戦陣営と称する）。従来、彼らは一般に「対日

協力者」と呼ばれ、筆者もこの視角を否定するものではない。しかし、本稿で特に和平陣営と称するのは、彼らは日本との協力を必ずしも第一義としなかった点に注目したいためである。事態を詳細に見れば、まず日本との戦闘停止を希求する点で彼らは共通しており、その上で各々の構想する中国の将来像に則して、日本との関係が構築された（その中に協力も含まれる）ということになろう。

本稿の問題設定の背景には一九七〇年代に始まり、九〇年代以降充実してきた該時期の所謂「傀儡政權」研究の蓄積がある。<sup>(1)</sup> 筆者もこうした研究の深化に大いに啓発された。その大きな方向は、従来「漢奸」の代表とされてきた汪精衛らの動きが必ずしも日本に追従するものではなく、中国の独立を希求していた側面が注目されるようになった点、また各種史料に基づいた実証的研究も増えてきた点にまとめられよう。<sup>(2)</sup> しかし、汪精衛や汪政權の活動については研究蓄積があるものの、上海市大道政府や維新政府といった汪政權以前の諸政權や、和平陣営内部の議論の解明は未だ不十分と考える。

筆者は日中戦争の間に登場した親日組織の相互比較は、対日和平陣営の実態に迫る方法の一つと考える。こうした団体・政權は、「傀儡政權」「偽組織」といった言葉が端的に表すように、従来日本との関係からその特徴が代表されることが多かった。しかし和平陣営参加者に則してみれば、その政見や主張は日本と速やかに戦争を止めるといふ点で共通するものの、その他の論点には違いも多く、これもまた各政權の性格や立場を規定していたと思われる。また抗戦派の主張に対するアンチテーゼとしての側面を持つ和平陣営の主張を分析することは、日中戦争中期の政治思想全体を俯瞰するためにも必要な作業である。こうした視角から興建運動を検討すると、その活動は極

めて興味深いものなのである。

## 2 興建運動に関する先行研究

興建運動に関しては、いくつかの研究が存在する。劉心皇は抗戦期の文学史に言及する中で、興建運動の刊行物を列記し、金雄白（汪政権下の新聞『中報』総編輯）の回想録<sup>(3)</sup>から一部関係者の履歴を紹介した<sup>(4)</sup>。劉傑は、興建運動は汪政権樹立工作と同様「重慶政権を切り崩し、広範な支持基盤を持つ親日政権を作り上げ、新たな日中関係を再構築するという野望に満ちた政治運動」とした。ただ、劉の論考の目的は、汪政権樹立前後の和平工作の最終目標は、和平勢力ではなく重慶国民政府であったことの論証にあるため、興建運動に関する議論は概要を追うにとどまり、中心人物袁殊についても具体的には触れていない<sup>(5)</sup>。房建昌は、岩井英一の経歴を詳細に調べたが、興建運動の具体的な動きについては触れていない。また根拠となる史料の出典が明記されていない点等で問題が残る。高網博文は主に岩井英一の回想録『回想の上海』（同書出版委員会、一九八三年、以下岩井）に依拠して興建運動を紹介し、金雄白の回想録から、「興建運動は」新民会や大民会と同様に日本人に駆使されている民間団体に過ぎ「なかつた」とする。しかし、氏が引用する岩井の回想録は、金雄白の興建運動に対する誤解も指摘している。金雄白が興建運動に強い警戒感を持った周仏海に近い立場にあったことを考えれば、その記述に全面的には依拠できまい。岩井によれば興建運動は日本や華北・満洲国からも注目されたという（岩井一一・一〇五・一二四頁）。多少の誇張を考えても、それまでの親日民衆団体とは一線を画する面があったようである。ではその違いは何か。興建運動を検討する

ことで、同運動の解明はもちろん、それまでに組織された対日和平団体の問題点や限界を明らかにすることもできよう。本稿では紙幅の関係から、興建運動の経過・人員・組織を中心に扱うとともに、本運動の中心人物袁殊について詳しく検討したい。

### 3 興建運動に関する史料

興建運動に関する史料のうち当事者によるものは、関係者の報告を岩井英一が編輯したと思われる『興亜建國運動と其現状』（外務省外交史料館所蔵、以下『現状』<sup>8</sup>）がある。また岩井に回想録があることはすでに述べた。

興建運動の刊行物（全て中国語）のうち、重要なものは『興建』月刊（一九三九年一〇月—四〇年二月）で、主な論稿は『興建叢書』（計一〇冊）に転載されたほか、運動一周年を記念した『興建第一年』（興建運動本部、一九四〇年、以下「二年」）、運動解散後に編纂された『興建運動』（興建運動本部結束委員会編、街灯書報社、一九四二年）にも、活动内容と共に再録された。その他上海日本総領事館特別調査班訳『興亜建國の理論と主張』（同班、一九四二年）もある。これらを通して興建運動の活動・主張をほぼ追うことができる。

袁殊に関しては、その息子曾龍による『我的父親袁殊』（接力出版社、一九九四年、以下曾龍）が詳しい。体裁は回想だが、実際は袁殊やその母賈仁慧等関係者からの聞き取り、書簡などを用いて執筆されている。本稿の執筆のため岩井の著作と比較したが、基本的な事実関係は一致しており、両書の史料としての精度は高いと判断される。その他『袁殊文集』（同文集編輯組編、南京出版社、一九九二年）には、袁殊の『文藝新聞』の記事や戦後の詩歌などが

載る。ただ『袁殊文集』には、興建運動も含めて日本と関係した時期の文章は掲載されておらず、他の時期に関しても全作品を網羅してはいない。

## 一 袁殊と岩井英一

### 1 興建運動までの袁殊

袁殊（袁学易）は一九二一年四月二七日湖北省蕲春県に生まれた。父袁曉嵐は古參の同盟会員（後に山東・湖北で県長を歴任）、母賈仁慧は商家の出身であった。一九年家族は上海へ移り、袁殊は印刷工場で働きながら小学校へ通った。二三年父親のついで、生活の互助・社会改造・文化促進等を標榜する上海の立達学園に入学（『袁殊文集』四六頁）、校内では無政府主義団体「黑色青年」に所属し、学内紙『窗報』を発行した（曾龍四一頁）。二五年上海で起きた五・三〇事件では、立達学園の学生代表として闘争に参加し、大夏大学学生代表の邵華・劉真如<sup>(9)</sup>、国民党員の胡抱一<sup>(11)</sup>と面識を持った。

二六年袁殊は学窓を離れ、胡抱一（国民革命軍江南別動隊司令）について北伐軍に参加し、二八年に上海へ戻るまで軍内で宣伝股少尉股員、中尉科員を歴任した。上海へ戻った袁殊は、再び胡抱一の紹介で全国賑災委員会調査組員として山東省へ赴任したが、怪我のためまもなく南京へ戻り、その後は上海で作家高长虹<sup>(12)</sup>が主催する無政府主義的文学組織狂飆社に参加した。国民党右派系の『民国日報』の『覚悟』副刊へ投稿したり、上海市党部宣伝部助理幹事に就いたりしたのもこの時期である（曾龍四四―四九・五三頁）。

この頃から袁殊はジャーナリズムへの関心を高め、二九年八月、日本へ渡った。日本での収穫は、日本語、新聞学、そして共產主義思想の受容であった(曾龍五九頁)。この時期袁殊は陳彬龢が上海で発行していた雑誌『日本研究』(中国語誌)に「日本政党人物的検点」<sup>(13)</sup>と「日本国勢現状概観」<sup>(14)</sup>という文章を投稿し、前者では日本社会の矛盾を捉え、高まる社会革命の機運を伝えている。

三〇年に帰国した袁殊は胡抱一から北京の航空学校への進学を提案されるが、高額な学費のため断念。三度胡抱一のとついで天津にいた何民魂<sup>(15)</sup>の下へ行き、その後上海へ戻った。この時、何民魂の下にいた翁毅夫<sup>(16)</sup>は袁殊と上海に向かうが、その後も『文藝新聞』(経理)や興建運動(管理主任)で袁殊と行動を共にした(曾龍六六頁)。上海に戻った袁殊は左翼的な聯合劇社に入り、国民党から目を付けられていたが、父袁曉嵐の知人方覺慧<sup>(17)</sup>らとの関係で配慮が加えられていたという(曾龍六九頁)。

三一年三月、袁殊はジャーナリズムへの思いを『文藝新聞』創刊という形で具体化した。『文藝新聞』には中国左翼作家聯盟(左聯)の関係者が多数参加したが、多方面の話題を掲載し、他の左聯の刊行物と比べて多くの読者を獲得した。魯迅も数度にわたり記事を寄せている(三二年五月一六日、一版等)。袁殊は、「『文藝新聞』最初之出發」(三二年三月一六日、一版)で、『文藝新聞』は不偏不党の立場から、人民大衆の要求に応えたと述べている。日本の侵略には厳しい論陣を張り、デモ行進・演劇活動などを通じて宣伝を行った。「請脱棄“五四”的衣衫」(三二年一月一八日、一版)では、満洲事変を引き起こした日本の帝国主義者への抵抗を呼びかけ、「今日の文化運動は学者や学生のみならず、多くの群衆の血と泪にも広がっている」と指摘したほか、「榴花的五月」(三二年五月二日、一版)

では、「大衆の革命的な民族戦争を推し進め拡大しなければなら」ないとし、「革命民族戦争の大衆文学」の必要性を主張した。

この時期の袁殊は、「集納主義」（袁殊が創作した Journalism の訳語：『袁殊文集』一二頁）を標榜し、積極的に新聞界に関わった点でも注目される。袁殊は三三年から三年間にわたって上海の新聞記者を集めて懇談会を開き、毎週日曜日、その内容を「記者座談」として上海で発行されていた『大美晚报』（米国系漢字紙）紙上に連載した。<sup>(18)</sup>

またこの頃袁殊自身は転機を迎えた。それは中国共産党への入党（一九三二年一月）である。中国共産党は上海の地下組織を代表する潘漢年・王子春<sup>(19)</sup>を通じて、袁殊を黨員としたのである。袁殊の任務は共産黨員の身分を隠して、国民党上層部の情報を収集することであった（曾龍一二二頁）。三二年、袁殊は王子春の指示により、上海市社会局局长で中統（中国国民党中央執行委員会調査統計局）を率いていた呉醒亜<sup>(21)</sup>の傘下に入り、三三年から三五年にかけて、呉醒亜・潘公展<sup>(22)</sup>の指導する反共秘密組織の幹社に関係した（曾龍一三三頁）。

この後、袁殊は三三年に岩井英一と知り合い、互いに情報をやりとりすることになる。世に三重スパイと称される所以である。岩井は当初袁殊の諜報能力を買っていたが、徐々に人間的な親しみを増したと回想し、一方の袁殊も岩井とは非常に良い友達になったとする。袁殊は三六年から三七年にかけて、岩井の援助で早稲田大学に留学もしている（曾龍一七七頁）。

## 2 岩井英一の経歴と上海での活動

一方、岩井英一は一八九九年愛知県に生まれ、一九二二年上海の東亜同文書院商務科を卒業後、同文書院の推薦で外務省に入省した。岩井は主に中国現地に勤務する所謂ノンキャリアで、四五年に辞職する迄、一九年間を中国各地で過ごした。省内では革新派の河相達夫と近しく、その著作の中国語訳を袁殊に依頼している（曾龍一九六頁）。中国人の友人も多く、同文書院の後輩で毎日新聞記者の田中香苗は「実に中国人に尊敬され、愛され、うらやましいほどの魅力をもたえた日本人であった」と回想している<sup>(23)</sup>。

ところで袁殊と岩井英一の情報のやり取りはいかなるものであったのか。曾龍は、岩井は袁殊が国民党のスパイであることは知っていたものの、共産党のスパイであることは知らなかったとする<sup>(24)</sup>。一方、岩井は、袁殊を通じて潘漢年と会見したこと、その際、袁殊が、潘漢年を「胡先生」として紹介するので宜しく応対してほしい、と岩井に言い含めたこと、さらに袁殊から廖承志<sup>(25)</sup>にも会わないかと提案があったが、岩井は断つたことを回想している。従って袁殊と共産党との関係を岩井が知っていたのは確かである。ただ一方で岩井が、潘漢年は興建運動の陳孚木<sup>(26)</sup>經由で袁殊に紹介された<sup>(27)</sup>のでは、と推測していることから、岩井は袁殊と共産党との深い関係までは知らなかったようである。

両者の回想で興味深いのは、戦後会うことのなかった二人それぞれが、大いに意気投合したことを証言している点である。袁殊の「情報は相互に利用し、お互いに騙しあっていたのであり、岩井は当然そのこともわかっていた」（曾龍一三三頁）という発言も当時の情報戦の実情を伝えている。実際、潘漢年を通じて得た共産党の情報につい

ては、岩井も回想している（岩井一五九頁）。このように一外交官とその知人の中国人との関係を基盤にしていた点に、興建運動の特徴の一つを見ることができよう。

## 二 興建運動の人と組織

### 1 興建運動の由来

三八年二月の岩井の上海への再赴任が現地の日本語紙で報道されてまもなく袁殊から岩井に面会を請う電話があった。当時袁殊は戴笠の要請で軍統局上海区の国際情報組少将の任にあった（曾龍一八九頁）。再会した二人は、「戦火の中から新しい日中関係を再建するために努力しよう」と話しあった（岩井七九―八〇頁）といい、袁殊も三八年春に岩井と秘密裏に面会したとしている（曾龍一九六頁）。

三八年一二月、日本との和平を模索していた汪精衛は重慶を脱出、和平運動を開始した。これに日本側から加担した陸軍の影佐禎昭は、汪精衛らを支援する政党組織の必要から、岩井に協力を依頼した（岩井九八頁）。ではこの時何故影佐は政党を必要としたのであろうか。影佐によれば三九年七月から九月にかけて、「各党各派を収容する工作の中で汪氏が最も困難を感じていたのは臨時維新内政府」への対応と、要路を求め汪の傘下に集まる人々の増加であった。彼等の中には地位を約束すれば和平主義者となるものの、適職が無ければ豹変して汪を誹謗する者もあったという。影佐には中国人を主体としたより意識の高い組織を設けることにより、こうした事態を改善する意図もあったと思われる。

早速岩井は本省情報部長河相達夫の了解ならびに資金を得て、政党の結成を袁殊に依頼し、袁殊もこれを了承した。また軍統の戴笠も袁殊の動きを支持していた(會龍二頁)。ここで注目すべきは、岩井が袁殊に対し中国人の主体性を尊重するとした点である。岩井は袁殊に対し「中国人自身の政党造りである以上、私の考え方に大きく逸脱しない限り私は一切口は出さない、万事袁の裁量に一任する旨言明しておいた」という。また幹部人員は「共產党員でも構わない」といった五カ条の方針を示した。<sup>(29)</sup>

この背景には、開戦以来、日本軍が占領地に設けてきた様々な親日組織が思うような結果を出していないことがあった。三七年の日本軍の上海占領から三年間、その施策は例えば西村展蔵による天下一家思想<sup>(30)</sup>、維新政府治下の民衆組織大民会による民徳主義といった形で喧伝されていた。しかし、前者が最終的に天皇への帰一を求めたように、こうした各種の「主義」に象徴される動きは、日本との親善を一方的に中国側に押しつける点で共通しており、結果として中国の民衆、とりわけ青年層を惹きつけるものとならなかった。和平人士でさえ「上海辺りで色々な日本人が色々新しい主義を唱へ色々な団体を拵へるべく目論んでゐて、それを検討して見ると、多くは中国を満洲と同じ様に考へてゐる傾向がありますね<sup>(31)</sup>」と指摘していることは、当時の中国側の気持をよく示している。岩井の提案はこうした事態を受けて、日本側が大幅に譲歩したことの表れでもあった。

袁殊は三九年九月中旬に新政党結成の手順を整え、下旬には具体的な工作に着手し(『現状』一七頁)、汪精衛が掲げた「和平・反共・建国」に代わって自主的に「興亜建国」をスローガンとした(岩井一〇八頁)。「興亜建国」という言葉の採用は、これが運動の目標を端的に表しているのと同時に、運動開始の三九年に入ると、「興亜」と

という言葉が日本を中心に広く使われるようになったことも関係していよう。ちなみに興亜院の設置は前年の一二月であった。「興亜」は時代の言葉でもあったのである。<sup>(33)</sup>

一月には興建運動幹部八名が岩井と共に日本を訪問し、総理大臣阿部信行・枢密院議長近衛文麿らと会談した(『一年』六一―六六頁)。こうして四〇年一月下旬から二月中旬の間に新政党を結成するため、秘密裏に活動がすすめられた(『現状』一五―一六頁)。

## 2 政党活動から文化思想運動へ

『現状』によれば、興建運動は「一党専制の政治形態を断乎排撃し、民意を代表する合法的なる各種勢力の協力による民主政治の実現を要請し」、「当初の間は長江流域の城市を中心とし、将来は漸次これを拡大深化」することを標榜した。またかつての所属に関係なく運動に賛同する者は幹部にも登用するとした。ただ参加者には「過去に於て三ヶ年以上の実践的闘争生活(政治活動)の体験を要求し」ていた(『現状』一三頁)。即戦力の重視も、この運動が単に組織ありきではなく、具体的な活動を重視していたことをうかがわせる。

ところがこうした興建運動の勢力拡大は、汪派国民党の周仏海の疑惑を招いた。周仏海は岩井や袁殊の活動が共産党と通じているとして、興建運動阻止を謀り、遂には、「汪派」国民党は新政府樹立から手を引く時まで主張した(岩井二頁)。汪を中心とする和平反共救国運動は「治標」的(対症療法的)であるのに対し、興建運動は「治本」的(治し方が根本的)であるといった自己規定、また興建運動が新政権への参画を想定していた点(『現状』一〇―一

一、五〇頁）も、周仏海らを刺激したかもしれない。このため政党の結成は見送られ、興建運動の目的は民衆を対象とした文化思想運動へと変更された（岩井一四二・四四二頁）。この後、興建運動はあくまでも「汪先生の通電に対する呼応」<sup>(35)</sup>で、「客観的、側面的には新生国民党の工作を助け、支持している」<sup>(36)</sup>とされた。また汪派国民党と比較しながら、興建運動の特徴として、政治的背景が無い（直接政治に関わらない）、民衆に重点を置いている、具体的行動を持たないといった点が強調された。<sup>(37)</sup>

もちろん運動の背後に日本の軍・外務省が関係している点、また周仏海との争いの後には汪政権から資金提供を受けるなど、興建運動は極めて政治的ではあった。しかし表面上はあくまでも大衆を対象とした文化的な運動であるとされ、政府要人が役員に名を連ねた大民会と維新政府の関係とは異なり、興建運動幹部が汪政権の中枢の役職を兼ねることもなかった。<sup>(39)</sup>一九四〇年二月一六日、上海礼查飯店で興建運動は一般に公開され、その模様は和平陣営の新聞各紙はもちろん、『大公報』など抗戦陣営の新聞でも報道された。<sup>(40)</sup>

### 3 興建運動参加者

「中核をなすものは凡て二十代の支那青年」というのは誇張があるものの、三九年の活動開始時点では中心人物の袁殊も二八歳で、運動の中核を担った人々が比較的若かったことは興建運動の特徴であった。また「彼等の多くは尚学窓に在る頃より国内に於ける政治闘争、文化工作、労働運動等に参加し」、かつては「蒋介石指導下の南京国民政府を中心に（中略）あらゆる努力を傾けて来た」人々でもあった（『現状』六頁）。これまでの親日組織が反共・

反蔣介石といった傾向を持った人々に率いられていたことと比べると、これは大きな違いであった。参加者の傾向は、機関誌『興建』が募集した懸賞文藝作品のうち、舞台劇のシナリオで一位に選ばれた作品の主人公「斐娜」が、抗戦陣営から和平陣営に投じた二二歳の女性であった点にも象徴的に表れている<sup>(41)</sup>。

こうした特徴は関係者の前歴<sup>(42)</sup>にも窺える。国民党関係者は、陳孚木（監察委員・交通部次長）、王浩然・白星洲（藍衣社）、招勉之（中央党部宣伝部）、唐巽（C・C系）、邱笑虹（中央党部、C・C系）、劉農輝（軍事委員会政治部）、宜菊生（力社幹事）、蔣国珍（実業部科長）と、特務機関での活動経験者が多い。共産党の関係者としては袁殊の他に、魯風（劉慕清）・翁從六があった。学者では蔣益之（中央政治学校・復旦大学教授）・楊鴻烈（中国公学・河南大学教授）、ジャーナリストでは張季平（『上海商報』・『華美晚報』）・鄭叔衡（『上海大晚報』）・劉祖澄（『大美晚報』・『雜誌』）・沈無胃（中国聯合新聞社）らが参画した。また「中国の菊池寛」と称された張資平（創造社）のほか、汪正禾<sup>(43)</sup>・傅彦長<sup>(44)</sup>といった作家も参加し、張は文化委員会主席に就任した<sup>(45)</sup>。労働組合関係者では徐阿梅・徐国痕・葉麗傑・呉純勃等の名が記録されている。また各種結社との関係もあったと考えられ、岩井は紅幫と関係のあった王浩然を回想している（岩井二二〇・二九三頁）。

彼らそれぞれと袁殊との関係は必ずしも明らかではないが、袁殊の人脈が基礎となっていたことは確かかなようである（岩井二一九頁）。後述するように、興建運動が財界に対してはほとんど何もできなかったのも、袁殊がこの方面の人脈を持たなかったことが大きく関係している。これは大民会が「日本と最も提携し易いのは実に実業家、商人等の階級」と中小の商工業者を軸に組織化を進めていったのとは対照的である<sup>(46)</sup>。

## 4 興建運動の組織

興建運動の組織は『現状』及び『一年』の記述が詳しい（以下本節は特記無き限り両書による）。興建運動の準備工作は岩井公館を本拠として、国内的には上海編訳社という名称で始まった。総顧問岩井英一、主幹袁殊の下に元藍衣社総副会計主任兼上海区総会計の白星洲が上海編訳社社長に就任し、主幹の下に文化・青年・労働・特殊民衆（後に特種委員会と改称）・専門の各委員会と軍事辦公室が設けられた。以下、設置された部署を列挙し説明する。

## 文化委員会

文化委員会は東方文化の宣揚・科学知識の普及・共產主義思想の排除・文化事業の振興・青年文化人の吸収などを任務とし、作家張資平を主席に三九年一月二日に成立した。傘下には藝学研究社・中国法律学社・新聞学会・文理圖書公司がおかれ、『新文苑』月刊が発刊された（三九年一月一日創刊）。『新文苑』月刊は純文藝雑誌を標榜し、管見の限り直接興建運動のスローガンを掲げることはなかった。これはあからさまな政治宣伝よりも場合によっては効果があるという判断に基づいていた。

## 青年委員会

「青年は国家の柱石」という方針の下、青年委員会は三九年一〇月二五日に成立した。主席には学生運動に関わってきた唐翼が就き、呉醒亜・潘公展（共に袁殊と関係の深い人物・曾龍二三頁）系の秘密結社「力社」・「中鋒社」に属していた者と中国共産党の指導下にあった左翼青年学生が多く参加した。初期の工作では国民党の青年組織である三民主義青年団及び青年救亡協会からの団員引き抜きを行うとともに、上海の主要な大学・中学の内部に支部を

広げた。傘下には上海法学院・大夏・暨南・復旦・光華・交通・東呉・震旦の各大学など一九の学校、二万余人を擁したという。興建運動は「日中両国青年の真摯なる団結を以てその原動力となす」という方針で、青年層の獲得が重視されていた。こうした活動は、開始から一年でかなりの成果を挙げたと報告されている。

刊行物『新青年』半月刊（三九年一月二〇日創刊）の編集方針は、「既に前進目標を見失つて思想的に彷徨しつつある青年に正しき目標を与へ、これを善導し、以て興建運動に参加」させることであつた。発行部数は当初千部であつたが、一年後には一万部を超え、さらに二カ月以内に五万部の発行が準備されるなど、読者は拡大しつつあつたという。

#### 労働委員会

労働委員会は労働大衆の生活改善ならびにその文化及び教育の水準向上を目的として三九年一〇月五日、紅幫とも関係の深い王浩然を主席に成立した。興建運動は政治勢力のパロメーターとして、上海の労働者の動向を重視し、彼らが思想的には共産党に惑わされ、現実生活は「工棍」（労働者のごろつき）に握られて改善がみられない、と指摘していた。労働委員会は「反共・和平」「労働者の生活改善」をスローガンに組織拡大を進め、五六の工会を傘下に、直接間接に三七万七千余人を領導したという。おそらくは既存の組織をそのまま傘下におさめたものが多かったと思われる。四〇年六月には、労働運動の経験者を幹部工作員とし、各団体へ工作方針を指示する第二期組織工作が始まつた。傘下には労働者子弟を教える建光第一小学校（三〇〇人強）が滬東に（三九年一月一日開校）、第二小学校（二〇〇人強）が浦東に、消費合作社の建華商店が滬東（楊樹浦路）・滬西（膠州路と労働生路の交差点）にそれ

それぞれ設けられ、学校には入学希望者が殺到したという。こうした労働者向けの商店・学校なども当事者の予想を超える組織化に寄与したと思われる。またこの頃上海の日本占領地で物価の高騰などが労働者を苦しめ、争議が頻発していた<sup>(47)</sup>ことも、労働委員会の活動に影響を与えた可能性がある。

刊行物『労働者』半月刊(三九年一月二五日創刊)は、中国の生存・民族の独立に労働者も資することを謳い、少なくとも四、五期までは、労働者の生活やストに関する情報で誌面が埋められた。管見では八期に興建運動要綱の掲載が確認できるが、ここに漸進的に支持者を広げていこうという編集方針が窺える。<sup>(48)</sup>同誌四期は「十二月份工潮概況」として三九年同月の上海における祥茂肥皂廠・密豊絨綾廠・中国国貨公司・永安紡織三廠など二〇カ所を越える工場の労働争議の事情を伝えているが、こうした動きは『申報』からも窺える。<sup>(49)</sup>また『申報』は、和平派の労働団体の活動も危機感を持って伝えている。<sup>(50)</sup>当時上海では、中華工人福益会(上海市長傅宗耀系)や上海工運協進会(汪派国民党系)等の団体も活動しており、<sup>(51)</sup>興建運動にもその関係者が含まれていた。<sup>(52)</sup>流動化する上海の労働運動の中で、興建運動もその一角を占めようとしていたことが窺えよう。

#### 専門委員会

専門委員会は興建運動の発展に伴い張修明<sup>(53)</sup>を主席に三九年一二月に置かれ、新聞・法律・教育・言語の専門に分かれていた。新聞部門では上海新聞記者聯誼社を設け、和平派の新聞記者だけでなく、抗戦派であっても和平の動きに心を寄せる記者、及び両派の記事を掲載する地方紙の記者を組織した。また『上海記者』月刊の発行、記者間の定期的茶話会の開催、新聞学校の設置などで、浙江・江蘇・安徽に組織を広げた。法律部門では、政治に関心の

ある弁護士を法律学舎に組織した。当初彼等の大部分は興建運動とは一線を画していたが、徐々に運動に接近する者が増えたという。教育部門では教学方面の研究のほか、「新時代教育諸問題」といったテーマで座談会が設けられた。言語部門は当初は翻訳団体で、外国文学の素養のある青年が集められたが、徐々に同一の目的〔興亜建国〕に向けて活動するようになったという。

以上の各委員会は時に相互に連携しながら活動を行った。<sup>(54)</sup>このほかにも経済委員会の設立と財界有力者の結集が予定されていた。しかし、興建運動は経済分野へは力を伸ばすことはできず、実際経済委員会が具体的な行動を起こせなかったことが反省されていた。

#### 特殊民衆委員会・軍事辦公室

青幫・紅幫の幫員獲得・再組織は運動の発展に不可欠との判断から、特殊民衆委員会（後に特種委員会）が設置され、傘下に安清・洪門・宗教の三部門が置かれた。詳細は不明だが、国民党・共産党双方の特務機関、さらに杜月笙らとの関係を背景に、袁殊が各種結社の引き出しを計ったことは想像に難くない。また各抗日游撃部隊及び各地の「匪徒」を収編整理し、日本軍当局および新中央政権に協力させるため軍事辦公室が設置された。

#### 主幹直屬事業

興建運動は様々な出版活動に関係した点にも特徴があった。主幹の傘下に、『興建』月刊（三九年一月一日創刊）、『新東方報』三日刊（三九年一月一日創刊）などの雑誌が置かれた（『興建運動』二四頁）他、上海で三八年から刊行され暫時休刊していた総合雑誌『雜誌』半月刊も、興建運動傘下で復刊した。内容は従来の方針が踏襲され、

漸進的な支持拡大が図られた。またこうした媒体普及のため建東印刷所、新光通訊社（一〇月二五日営業開始）も組織された。この他重慶国民政府の支配地域に限定し、香港・桂林・重慶・上海で活動する非常工作部（二月活動開始）が設置された。<sup>(55)</sup>

### 三 興建運動に対する反応

#### 1 中国での反応

では興建運動に対して、どのような反応があったのであろうか。複数の史料から探ってみたい。一つは機関誌『興建』の募集した文藝作品（懸賞）への反応である。『興建』は四〇年七月まで運動に関する論文・文藝作品・歌詞を募集し、論文八六二件、文藝一三三六件（うち創作小説六三九件、舞台脚本四五〇件、映画脚本二九七件）、歌詞一五五件が集まった。優秀作品は『興建』に掲載されたほか、賞金が授与された。投稿者の居住地は華北四一%、華中三五%、華南一五%、その他（抗戦区域及び国外）九%の割合であった（『興建運動』一三三―一三四頁）。ここから多くの支持があったと即断はできないが、少なくとも上海以外の地域からもかなり反応があったことは確認できる。

興建運動の拡大にはこの時期の社会の雰囲気も追い風となった可能性が高い。当時『申報』は上海の経済界に蔓延する和平の風説を攻撃し、<sup>(56)</sup>『大陸新報』は「教育界、文化界が抗日意識を清算」し和平団体を組織している様子、<sup>(57)</sup>大学・専門学校教職員の和平陣営への参加、<sup>(58)</sup>上海の大学生組織の間に生じた和平派と抗戦派の対立等を伝えている。<sup>(59)</sup>また重慶中央放送局より「興建運動の首脳部陳孚木、張資平等が汪派に投じ文化界その他に働らきかけ和平運動を

続けてゐる事は国民を裏切る漢奸なり」といった放送も行われていた。<sup>(60)</sup>この時期重慶では和平派の結社の組織や、和平派の伝單（宣伝ビラ）が散布されることもあり、重慶当局が和平陣営の動きに極めて敏感になっていたことは確かであろう。

## 2 日本での反応

一九四〇年二月の興建運動公開の前後から、上海の日本語紙では袁殊・陳孚木の論稿が掲載されるようになり、まもなくその動きは日本国内でも紹介された。日中関係が新たな局面を迎えつつあるという期待感とあいまって、興建運動は注目されたのである。

第一書房発行の文化雑誌『セルパン』（四〇年四月号）の特集「東亜言論人の交流」では、中国人四名の論考のうち三名を興建運動関係者が占めた。編集者は「若々しい情熱こそ興亜中国の新生生命を象徴するもので（中略）日本側からも元氣な声援を送らねばならない」<sup>(64)</sup>と述べ、また半谷高雄が興建運動の様子を伝えた。<sup>(65)</sup>同誌は翌五月号でも特集「これからの日本と中国」に、興建運動から陳孚木・陶楽天・唐巽の論稿を掲載した。

日本評論社発行の総合雑誌『日本評論』（四〇年五月号）は「日支合作の問題」という特集を組み、本誌で周仏海・陳公博の論稿を掲載、別冊附録『新支那読本』掲載の中国側の三論文は全て興建運動メンバーが占めた。同じく附録掲載の澤村一夫「新中央政府と青年層」は、興建運動を「上海を中心として青年層、労働者によって結成された新支那唯一の民衆組織」として紹介し、「運動の将来性は刮目して期待し得る」と評した。<sup>(66)</sup>

この頃、興建運動を間近で見た日本人の一人に児玉誉士夫がいる。児玉は河相達夫を通じて岩井英一へ紹介され、興建運動にも関わるようになった。<sup>(67)</sup>岩井は、後に児玉が日本で組織した興亜青年運動本部も興建運動によって何らかの影響を受けたと推測する(岩井一四九―一五〇頁)。実際児玉は岩井らの活動を肯定的に回想しており、<sup>(68)</sup>中国での見聞も活動に刺激を与えたようである。

では児玉は袁殊らの活動をいかに見ていたのか。三九年一月の私信の中で、児玉は日中の青年がどこに一致点を見出していくのかに不安を抱きつつも、それを見出すべく大いに努力していく決意を表している。四二年三月、南京で汪精衛と会見した際には、袁殊等の青年運動を中国屈指と評価している。<sup>(69)</sup>

この他にも袁殊と交流のあった日本人が確認できる。袁殊上京時に笠木良明(満鉄・大亜細亜建設社)が設けた宴席が参考となろう。そこには外務省関係では岩田冷鉄・高瀬侍郎、右翼では河飯捨藏・三浦義一(国策社)・片岡駿(まことむすび社)・狩野敏(行地社)、満洲国関係では岸要五郎(副県長など歴任)・奥戸足百(軍政部顧問部嘱託)らが確認でき(『二年』巻頭写真頁)、大亜細亜建設社関係者を中心に、興建運動への関心を持たれていたことが窺える。実際袁殊も同社名刺交換名簿に厳軍光として名を連ねている。<sup>(70)</sup>一方、興建運動では近衛の東亜新秩序声明を重視していたものの、近衛文麿ブレインとの直接の関係は確認できていない。

### 3 汪政権成立後の興建運動

興建運動は汪政権成立後も順調に発展し、一九三九年九月以来、直接運動に関わった学生は一万有余人、組織さ

れた労働大衆は五〇余万に及んだという<sup>(71)</sup>。また汪政権の憲政実施の動きに合わせて、四〇年九月から『憲政月刊』の刊行を開始、一月からは日刊紙『新中国報』を発行するなど、組織は拡大しつつあった。

しかしこの時期、汪精衛はより強力な民衆組織結成に動き出していた。それが東亜聯盟運動である。柴田哲雄によれば、東亜聯盟の結成には華中の日本軍の意向も強く働いていたものの、汪政権側も東亜聯盟の「政治独立」の規定などから、積極的に受け入れた側面があったという<sup>(72)</sup>。筆者も大筋でこの見解は的を射ていると考える。また四〇年一月の東亜聯盟中国同志会の結成、さらに四一年二月の東亜聯盟中国総会発足の背景には、これを憲法制定の国民大会の代わりに行うとの汪政権の意図もあったと考える。実現しなかったものの、四〇年九月九日、憲政実施委員会は翌年一月一日の国民大会召集を決議していた<sup>(73)</sup>。まさに国民大会と入れ替わるように東亜聯盟運動が具体化しつつあったのである。

四〇年一月一七日、興建運動本部は解散した。「解消声明書」は、以後汪精衛の指導に従い、国民党を中心として尊重し、孫中山の大アジア主義を守って東亜聯盟の結成に協力すると謳い（『興建運動』二八―二九頁）、翌年二月一日に東亜聯盟中国総会へ合流した。

ただ興建運動の解散は、必ずしもその終息を意味しなかった。むしろ袁殊らの活動は汪政権全体の動きに包摂される中で、重要な一角を占めるようになる。東亜聯盟中国総会で、袁殊は宣伝委員会副主任委員に就任<sup>(74)</sup>、清郷工作開始後は政治工作団団長<sup>(75)</sup>、さらに江蘇省教育庁長となり、汪政権に直接関わっていく。言論活動でも、『興建』月刊こそ終刊したものの、『憲政月刊』は『政治月刊』と名を改めて四五年五月まで発行され、<sup>(77)</sup>『政治月刊』を買え

ば、他の刊行物は読む必要なし」と称されるまでになる。<sup>(78)</sup> また興建運動の傘下にあった総合雑誌『雑誌』半月刊も四五年八月まで刊行を続けた。新聞界では『新中国報』が継続した他、『新聞報』のように『新中国報』から総編輯他の多数の記者が送り込まれた新聞もあった(『岩井二三頁』)。運動が実質的に汪政権内部に残ったことは、彼らの組織力や言論活動が汪政権にとつても無視できなかったことを示している。興建運動は汪政権成立前夜の和平運動の中でも際立った存在であったと言えよう。

## 結語

本稿では興建運動の登場から解散までを、運動の経過・人員・組織を中心に明らかにした。運動の中心となった袁殊は、国民党との関係を基盤に早くからジャーナリストとして活躍し、共産党入党後は、上海領事館の岩井英一とも情報をやり取りする関係であった。一九三九年、汪精衛が和平運動を始めると、袁殊と岩井の関係を基盤に運動が組織された。興建運動は日本の要請で組織されたものの、活動を担ったのはそれまで抗日陣営にあった活動家や文化人・大学教授、国民党・共産党と関係を持った人々であった点、労働団体や学生・青年を運動の担い手に組織しようとした点などで、従来の和平陣営の運動とは明らかに異なっていた。さらに興味深いのは、活動は中国側に任せられ、その自主性が認められた点である。興建運動が展開した汪政権成立前夜は、国民大会開催が予定されるなど、汪派拡大の可能性がある時期であった。学生や労働者に絞ったことに加え、こうした事情もあいまって、興建運動は従来の和平団体と比べて急速に拡大したと思われる。

残念ながら興建運動に関する史料は、運動の刊行物や日本側の文書が中心で、管見の限り中国の檔案館に關係する史料は確認できていない。また夙に知られるように当時の中国新聞が、抗戦陣営・和平陣営双方共に、積極的に對抗する相手側の動きを報道することがなかったことも、興建運動を含む和平陣営を、異なる視点から評価することを難しくしている。それでも、労働委員会の『労働者』半月刊が取り上げた労働争議は、抗戦陣営の『申報』や国際労働機関中国分局による『国際劳工通訊』<sup>(79)</sup>も同様に報じていることを考えると、その活動は少なくとも当時の上海の労働界の事情を反映したものであったと判断できよう。

こうした状況下で、『大陸新報』が伝えるように、重慶政府が興建運動を手厳しく非難したことは、抗戦陣営の動搖を抑えることが目的と思われるが、図らずも彼らの興建運動への警戒感を伝えていよう。さらに満洲国協和会や華北の新民会からも視察が来たこと、周仏海が興建運動を非常に警戒したこと、運動解散後も汪政権が彼等を取り込んだこと等を考え合わせると、興建運動が公称する動員人数に多少の誇張があったとしても、この運動が和平陣営において相應の力を持っていたとすることは、無理がないように思われる。また興建運動一年目の報告『興建第一年』が、成果のみならず自ら達成できなかった課題についても、はつきり言及し（そうでなければ報告書の意味がないが）、決して総花式のものでなかった点にも留意しておきたい。

興建運動では、「この戦争で中国は負けたわけではない」「日本の中国への攻撃は誤りであった」「日本が変らな

いのであれば、ふたたび我々は抗戦陣営に戻る」といった、従来の親日団体では到底考えられない主張も登場する。時に日本に対してなされたこうした厳しい批判も、和平か抗日かを決めかねていた人々にとっては、耳目に入り易

いものであったろう。興建運動の主張については別稿で検討する。<sup>(80)</sup>

一方、興建運動の存在は、日本にとっては「暴支膺懲」に代表されるそれまでの日本の対中国方針が大きな変更を迫られていたことを表している。民衆の支持を取り付けるためとはいえ、結果としてそれまで抗日陣営にあった国民党特務や共産党関係者に頼らざるを得なかった点は皮肉であった。また、和平陣営においても学生や労働団体に的を絞った運動が追求されるようになったことは、その獲得が日本占領地内の政権の帰趨を左右するという意識が共有されつつあったことも示しているよう。

では興建運動は、共産党にとつてはどのような意味を持ったのか。興建運動に袁殊が関わったことで、共産党は対日和平陣営へのより密な情報ルートを得ることができたと見えよう。共産党がこれによって積極的な行動を考えていたとまでは即断できないが、潘漢年が袁殊を通じて汪精衛とも会見している（岩井一六五頁）ことを考えれば、少なくとも共産党が和平陣営との間に何かあった場合に備えていたことは確かであろう。興建運動以来の新聞社・雑誌社は共産党地下黨員をカモフラージュする役割をも果たし、日本軍に拘束された共産黨員が、袁殊を通じて釈放されることもあった（曾龍二四二―二四三頁）。

最後に袁殊のその後についても触れておきたい。日本の敗戦後、袁殊は重慶の軍事委員会調査統計局（軍統）より忠義救国軍中将に叙されるが、四五年一〇月には蘇北の共産党支配地区へ移り曾達齋と改名した。四六年華東局連絡部第一工作委員会主任に就任した。四七年秋には大連へ移り、博古堂經理の名義で、対香港貿易や帰国する日本人に関する工作に従事した（曾龍二五〇・二五四・二五六頁）。この時期の袁殊に会ったことを、後年天野元之助が

回想している<sup>(81)</sup>。その後四八年三月に国民政府からは漢奸として逮捕令が出されている<sup>(82)</sup>。五五年、戦時中の日本との関係を疑われた潘漢年が逮捕される(潘漢年・楊帆事件)と、袁殊も連坐する。その後二〇余年を獄中で過ごした後、釈放された。八二年に名誉回復され、八七年に死去、北京八宝山革命公墓に葬られた(曾龍二四・二八四・三二一頁)。

註

- (1) John Hunter Boyle, *China and Japan at War, 1937-1945: The Politics of Collaboration*, Stanford, Calif., Stanford University Press, 1972; Gerald E. Bunker, *The Peace Conspiracy: Wang Ching-wei and the China War, 1937-1941*, Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1972.
- (2) 近年日本で出版された研究書に限っても、柴田哲雄『協力・抵抗・沈黙——汪精衛南京政府のイデオロギーに対する比較史的アプローチ』(成文堂、二〇〇九年)、堀井弘一郎『汪兆銘政権と新国民運動——動員される民衆』(創土社、二〇一一年)、土屋光芳『汪兆銘政権論——比較コラボレーションによる考察』(人間の科学社、二〇一一年)がある。中国でも張生他『日偽関係研究——以華東地区為中心』(南京出版社、二〇〇三年)のように従来の「漢奸論」の枠にとどまらない研究が登場している。
- (3) 金雄白『汪政権的開場与収場』李敖出版社、一九八八年。
- (4) 劉心皇『抗戰時期淪陷区文学史』成文出版社、一九八〇年、八四—八八頁。
- (5) 劉傑『汪兆銘政権の樹立と日本の対中政策構想』『早稲田人文自然科学研究』五〇号、一九九六年一〇月、一四六—一五四頁。
- (6) 房建昌『從日文檔案看「岩井機関」与「興亜建国運動」始末』『檔案史料与研究』二〇〇二年三期、七二—七八頁。
- (7) 高綱博文『日本占領下上海における日中要人インタビューの記録——木村英夫著「亜細亜再建秘録——敗戦前夜の解説」』『十五年戦争極秘資料集補卷一九』(不二出版、二〇〇二年)。
- (8) 『興亜建国運動と其現状』一九三九年十二月、外務省外交史料館、支那政党、結社関係雑件、二二、興亜建国運動。アジア歴史資料センターB02031687000(以下番号のみ)。

- (9) 邵華(一九〇一—七三)…安徽潁上人。大夏大学教育系卒業後、第二七軍政治部主任、国民党中央宣傳部幹事、国民党安徽省党部委員等歴任。徐友春主編『民国人物大辞典(増訂版)』河北人民出版社、二〇〇七年(以下『民国人物大辞典』)、七八三頁。
- (10) 劉真如(一九〇五—四七)…安徽渦陽人。大夏大学卒業後、広州で革命工作に参加、国民革命軍東路軍司令部第一科科长。二七年安徽省党部工作に従事。安徽省地方志編纂委員会編『安徽省志 六六 人物志』方志出版社、一九九九年、二三六—二三七頁。
- (11) 胡抱一(一八九一—一九四三)…別名胡愚。江蘇淮陰人。孫中山の衛士を務め、第二次革命失敗後も地下工作に従事。一九二六年の北伐軍に上海別動隊司令として参加。胡明「胡抱一事跡紀略」『鍾山風雨』二〇〇五年三期、四〇頁。胡明は胡抱一の孫。
- (12) 高長虹(一八九八—一九五四)…本名高仰愈、長虹はペンネーム。山西孟県人。魯迅の影響を受けた作家。『民国人物大辞典』二二九三頁。
- (13) 『日本研究』新紀元月刊社、一卷二号、一九三〇年二月、七七頁。
- (14) 『日本研究』一卷七号、一九三〇年七月、一一頁、及び一卷八号、一九三一年一月、一〇一頁。
- (15) 何民魂(?—一九五三)…江蘇松江人。字啼紅。一九二七年江蘇省政府委員、南京市長。二八年国民政府建設委員会委員、私立南京文化大学校長。『民国人物大辞典』六六五頁。張衡夫「何民魂其人其事」広東省政協學習和文史資料委員会編『広州文史資料存稿選編』五輯、広東人民出版社、二〇〇五年。
- (16) 翁毅夫(一九〇七?—四八?)…何民魂の南京市長時に南京電通公司の經理となる。何民魂と天津にあつた際に袁殊と知り合い、共に上海へ移り、翁従六と改名。又翁永清を名乗る。中国共産党に入党。戦後は袁殊と共に解放区へ移る。共産党軍の張家口入城後、華東から華北へ経済工作のために向かうが、途中自動車事故で死去(曾龍六六頁)。
- (17) 方覚慧(一八八六—一九五八)…湖北蕪春人。字子樵。早稲田大学で学ぶ。国民党中央執行委員、南京市特別党部常務委員等歴任。『民国人物大辞典』二三三—三四頁。
- (18) 揮逸羣「記者道序」袁殊「記者道」群力書店、一九三六年、一頁。この他にも袁殊は『学校新聞講話』(湖風書局、一九三三年)、『新聞大王哈斯特』(良友図書印刷、一九三三年)といったジャーナリズムに関する書籍を執筆した。

(19) 潘漢年(一九〇六—七七)・江蘇宜興人。一九二五年中国共産党入党。日中戦争から国共内戦期に上海を中心に地下工作に従事。人民共和国成立後、上海市副市長等歴任。五五年四月「内奸」とされ失脚。七七年死去。八二年名誉回復。『民国人物大辞典』二五五六頁。

(20) 歐陽新(?—一九三七)・王子春は変名。ソ連の軍事学校で学んだ後上海へ戻り、潘漢年の下で情報収集。上海の共産党組織崩壊により三四年三月から翌年二月にかけてモスクワに逃れるが、三七年七月八月頃処刑。穆欣「隱蔽戰綫的伝奇人物歐陽新」『党史文匯』二〇〇三年七期、二七—二九頁。曾龍一五八頁。

(21) 呉醒亜(一八九二—一九三六)・湖北黄梅人。中国同盟会に入り、孫中山の護法運動、北伐に参加。国民革命軍では総司令部秘書、総政治訓練部顧問等を歴任。その後、上海特別市党部常務委員兼社会局局长等歴任。『民国人物大辞典』六四四頁。

(22) 潘公展(一八九四—一九七五)・浙江呉興人。聖約翰大学外語系で学ぶ。二七年中国国民党に入り、「申報」総編輯、上海政治分会委員等歴任。C・C系主要メンバー。『民国人物大辞典』二五四四頁。

(23) 田中香苗「心に灯を点じた書院の人々」『江南春秋』

——東亜同文書院二十四・二十五期生記念誌』一九八〇年、

三四六頁。敗戦を日本で迎えた岩井は、外務省に辞表を提出、戦後は財団法人在外同胞援護会理事として引揚者の援護に携わったほか、亡命中国人を支援する善隣友誼会の常任理事として活動を続け一九九〇年死去。岩井二〇頁。中村義他編『近代日中関係史人名辞典』東京堂出版、二〇〇一年、八六—八七頁。

(24) 曾龍一三四頁。ただこの部分は共産党への配慮である可能性も高い。

(25) 廖承志(一九〇八—八三)・広東恵陽人。東京で生まれ青年時代を日本で過ごす。中国共産党員として日中戦争時期は香港を中心に地下活動。『民国人物大辞典』二二二—二頁。

(26) 陳孚木(一八九二—?)・字公謨。雲南講武学堂卒。広州『民国日報』主筆。広州国民政府監察委員、交通部政務次長、上海招商局総理等歴任。福建人民政府参加。戦後、大連で国華銀行董事。興建運動への参加は廖承志の命とも言われる。『民国人物大辞典』一四一—八頁。金雄白四四六頁。

(27) 岩井一五五—一六二頁。潘漢年と岩井の会見について、袁殊も潘漢年を朱子文の在野の友人「胡先生」として

岩井に紹介したと回想している(曾龍二四四―二四八頁)。

(28) 影佐禎昭に関する部分はその著『曾走路我記』による。

白井勝美編『現代史資料一三 日中戦争(五)』みずず書房、一九六六年、三七三―三七五頁。

(29) 岩井一〇三一―一〇五頁。この回想は『現状』の記述と符合している。

(30) 拙稿「上海市大道政府と西村展蔵」『近きに在りて』五二号、二〇〇七年。

(31) 座談会における鉄道部長傅式説の発言。「南京座談会」今中次磨『東亜の政治的新段階』日本青年外交協会、一九四二年、一八一頁(原載『大陸』一九四〇年五月号)。

(32) 敵軍光(袁殊)他『興亜建国論』興建月刊社、一九三九年、六一―七頁。

(33) 「興亜」という言葉はそれまでもあったが、日本の新聞での登場回数は一九三九年から激増する。書籍の題名で盛んにつかわれるようになるのも一九三九年からである。

(34) 周仏海はこの件について一九四〇年六月三日の日記に「余としては、彼ら(袁殊・岩井ら)を敵に追いやるよりは手を組んで友としたほうがよい」と記している。周仏海著・蔡徳金編『周仏海日記全編』中国文聯出版社、二〇〇三年、三〇四頁。

(35) 曹翰「興建運動的当前使命」『興建』月刊二卷五号、一九四〇年八月、一三頁。

(36) 敵軍光(袁殊)「我們的三大目標」『一年』九六頁。一九三九年二月三〇日執筆。

(37) 曹翰「興亜建国理論的根柢」『興建』月刊二卷二号、一九四〇年五月、五一―六頁。また興建運動の軍隊不保持も声明された。『興建』月刊三卷一号、一九四〇年一〇月、二三頁。

(38) 月額三万円の援助を受けていた。周仏海著・蔡徳金編『周仏海日記全編』三三三頁。

(39) 汪政権に設けられた憲政実施委員会の委員に興建運動のメンバーが名を連ねているが、これは憲政実施という挙国的な事情による例外といえよう。

(40) 「陳孚木等組織「興亜建国会」」『大公報』香港、一九四〇年二月一七日、三版。

(41) 姚志平「英勇的人們」『興建運動』五三四頁。

(42) 関係者の経歴は『現状』を基に、『回想の上海』、『憲政月刊』一期(一九四〇年)、『民国人物大辞典』、滿蒙資料協会編『中国紳士録』(同会、一九四二年)、『大陸新報』(四〇年二月一九日)で補足した。

(43) 汪正禾(一八九八―一九五九)：浙江余杭人。別名汪

- 馥泉。一九一九年日本に留学。上海で著述・翻訳に従事。復旦大学等で教鞭をとり、雑誌『現代』『文摘』等を編集。四〇年上海で『學術』雑誌主編。戦後、東北人民大学教授。杭州余杭区政府ホームページ [http://www.yuhang.gov.cn/class/class\\_22/articles/78939.html](http://www.yuhang.gov.cn/class/class_22/articles/78939.html) (二〇一二年五月二日閲覧)。
- (44) 傅彦長 (一八九二—一九六一)：江蘇武進人。上海南洋公学卒業後、日本へ留学。四〇年代には雑誌『交友』『新東方』等で活躍。銭理群主編『中国淪陷区文学大系史料卷』広西教育出版社、二〇〇〇年、四三二頁。
- (45) 張資平については森美千代「日中戦争下の張資平——『和平運動』への参加過程」(『野草』五四号、一九九五年八月)が詳しい。
- (46) 畑部隊特務部「支那事変時に於ける支那民心の動向と大民会に就いて(一)」一〇頁、一九三八年一〇月、防衛省防衛研究所所蔵陸軍省陸密大日記、C04120649400°。
- (47) 「社評 概論工潮」『申報』一九三九年二月二四日、四版。
- (48) 『労働者』半月刊、四・五期、一九四〇年一月、及び八期目次(『興建』三卷三号、一九四〇年二月、五七頁)。
- (49) 「北区各工廠 罷工風潮」(二月一三日、二版)、「各工廠商号怠工租界当局重視」(二五日、九版)、「永安三工廠
- 昨已復工」(『国貨公司勞資糾紛昨已圓滿解決』(一六日、一〇版)等。
- (50) 「日方操縱偽工会脅迫工人入会」『申報』一九三九年一月二四日、七版。
- (51) 黄美真「淪陷时期的上海工運」『歴史研究』一九九四年四期、饒景英「上海淪陷时期“偽工会”述評」『史林』一九九四年四期、王春英「日本在華占領区内的排英運動——以一九三九年英資綸昌公司罷工案為中心」『近代史研究』二〇一〇年六期。
- (52) 朱斐声(???)・朱惕悟。かつて蘇州・海門等で国民党執行委員。興建運動では労働委員会組織委員であったが、中華工人福益会組織委員を兼ねていた。『現状』五九頁。
- (53) 張修明(一九〇三—?)：江蘇川沙人。上海羣治大学卒。興建運動以前の経歴は不明だが、後に鎮江地区清郷副主任・鎮江県県長・江蘇省政府政治工作团团长等歴任。中国第二歴史檔案館編『汪偽政府行政院會議録』二三冊、檔案出版社、一九九二年、六一六頁。
- (54) 「“古銭”の使ひ」『東京朝日新聞』一九四〇年九月一二日夕刊、二面。
- (55) 四〇年六月から七月にかけて「中支の民衆運動をして興

建運動一色に塗り潰し得る」との判断から、岩井・袁殊が香港へ赴き、桂林から数名の参加が予定されていた。「三浦総領事より有田外務大臣」(一九四〇年六月一七日)。302031687000。

(56) 「充溢市場的和平風説」『申報』一九四〇年一月三日、四版。

(57) 「和平の声巷に満つ 凋落の抗戦陣営」『大陸新報』一九四〇年一月二日、七面。

(58) 「大学・専門校の教職員和平への協力」『大陸新報』一九四〇年一月二三日夕、二面。

(59) 「和平か抗日か 深刻な学生層の対立」『大陸新報』一九四〇年四月五日夕刊、二面。

(60) 「興建運動に重慶動揺」『大陸新報』一九四〇年二月二〇日、二面。

(61) 「和平結社続々現る」『大陸新報』一九四〇年二月四日、七面。

(62) 「和平反共の伝單 重慶の街頭に散布」『大陸新報』一九四〇年三月二九日夕刊、二面。

(63) 嚴軍光「我等が三大目標」『大陸新報』一九四〇年一月一〇日・一一日、二面。陳孚木「日支合作と興亜建国」同紙一九四〇年二月一三―一六日、二面。

(64) 「執筆者の椅子」『セルパン』一九四〇年四月号、一八―一九頁。

(65) 半谷高雄「中国言論界の動向」同右二二―二五頁。

(66) 澤村一夫「新中央政府と青年層」『新支那読本』一九四〇年、一九七―一九九頁。

(67) 児玉譽士夫「悪政・銃声・乱世——風雲四十年の記録」弘文堂、一九六一年、一七〇―一七四頁。岩井三六三頁。

(68) 「悪政・銃声・乱世」一七三頁。

(69) 「獄中獄外」一九二―一九三、二五〇―二五二頁。

(70) 「名刺交換名簿」『大亜細亜』一九四一年一月号、大亜細亜建設社。

(71) 「興亜建国本部 声明解散」『南京新報』一九四〇年一月一八日、一張一版。

(72) 柴田前掲書一九頁。

(73) 「明年元旦召開国民大会」『南京新報』一九四〇年九月一〇日、一張一版。

(74) 「東亜聯盟中国総会創立盛典」『政治月刊』一卷二期、一九四一年二月、三四頁。

(75) 袁殊「慰勞与道謝」『政治月刊』四卷一期、一九四二年七月、三四頁。

(76) 袁殊「放眼亭畔話往事——憶打入汪偽的四年」『蘇州

史志資料選輯（三輯）蘇州市地方志編纂委員會辦公室、  
一九八六年三月、三頁。

(77) 『興建』月刊連載の大川周明「日本二千六百年史」も  
『政治月刊』一卷二期から四期（一九四一年）にかけて引  
き続き連載された。

(78) 因明「幾個偏重政論的刊物」『中国公論』七卷一期、  
一九四二年一月、七七頁。

(79) 『国際劳工通訊』国際劳工局中国分局、七卷二期、一  
九四〇年二月、一二五—一二九頁。

(80) 拙稿「興亜建国運動とその主張——日中戦争期中国に  
おける和平論」『中国研究月報』六六卷七号、二〇一二年  
七月刊行予定。

(81) 天野弘之・井村哲郎編『満鉄調査部と中国農村調査  
——天野元之助中国研究回顧』不二出版、二〇〇八年、一  
一四頁。

(82) 『国民政府公報』一九四八年三月一三日、六頁。

（千葉商科大学非常勤講師）